藤沢市
藤澤浮世絵館
FUJISAWA UKIYO-E MUSEUM

浮世絵館だより

2022年
7月
Vol.18

キュンと藤沢するまち。

もくじ

展示紹介
江の島詣と浮世絵でみる弁財天信仰の歴史……P1,2
「江島詣」の隆盛と江島の御師……P3
二代目オニカゲ学芸員のページ⑦ 浮世絵を自分で摺ってみると…P4
浮世場なれ／編集後記……P4

FUJISAWA LEGACY ENOSHIMA UKIYO-E

江の島詣と浮世絵でみる弁財天信仰の歴史

会期　2022年7月5日(火)～9月4日(日)

【図1】歌川広重「相州江之嶋弁才天開帳参詣群集之図」

現在も風光明媚な名所として多くの人が訪れる江の島は、江戸時代になってから弁財天信仰を中心とした江の島詣の流行をきっかけに広く知られるようになりました。弁財天は武力、弁舌、技芸、財富など様々なご利益がある女神として古くから信仰されており、江の島弁財天も多くの人々の信仰を集めました。本展では江の島詣に関わる郷土資料と浮世絵を中心に、江の島弁財天信仰の歴史を紹介します。

「『江島詣』の隆盛と江島の御師」（本紙３ページ）では弁財天信仰に造詣の深い研究者で、前鎌倉国宝館館長でもある鈴木良明氏にご寄稿頂きました。

江の島は『江島縁起絵巻』によると、欽明天皇13年（552）に海底より地震と共に出現し、江の島弁財天と眷属が降り立ったとされています。以降、江の島に本宮（岩屋）、上之宮、下之宮の三社が創立され、各伝来の弁財天が祀られました。神仏習合の神社であった三社はそれぞれに祭祀、管理を主導する寺院の「別当」が存在し、巳年と亥年の6年毎に、三社が順番に弁財天の開帳を行いました。開帳の際には多くの参詣者が江の島へ訪れたことが郷土資料や浮世絵から伺えます。江の島を題材とした浮世絵などの出版物の多くは弁財天開帳に合わせて刊行されていました。

江の島弁財天の開帳の起源は不明ですが、記録上の江の島弁財天開帳の最古例は元和元年（1615）の本宮岩屋秘尊の開帳です。しかし、この時期は浮世絵も未成立であったこともあり、開帳に合わせた浮世絵は出版されていません。江の島浮世絵が描かれるのは江戸時代後期の天明年間（1781－1789）からで、初期の江の島は朝日や富士山と一緒に描かれた縁起絵や美人画、役者絵の背景として描かれていました。

【図２】作者不詳「相州江ノ嶋弁才天上下ノ宮己巳年御開帳繁栄之全図」

江の島浮世絵は次第に出版数が増え、江戸後期に最も多く描かれました。これは、19世紀前半の旅行や名所絵ブームをきっかけに江の島詣が流行したことが背景にあります。江の島も名所として様々な描かれ方をするようになり、その姿形だけではなく参詣の道や道中風俗も画題となりました。江の島浮世絵の刊行数は江の島弁財天の信仰が広まるに連れて増えていったと言っても過言ではないでしょう。

明治時代になると江の島弁財天信仰は大きな変化を迎えます。廃仏毀釈の影響により江の島各三社は仏教的な要素を取り払い、奥津宮（旧本宮御旅所）、中津宮（旧上之宮）、辺津宮（旧下之宮）の三社からなる「江島神社」へ改称しました。また、各三社に祀られていた弁財天に変わって、海上航海の安全などを司る宗像三女神である多紀理比賣命、市寸島比賣命、田寸津比賣命が配祀されました。

しかし、弁財天信仰は完全に失われることはありませんでした。江島神社へと変化した後も、弁財天開帳が行われ、合わせて江の島詣に向かう信者の様子が描かれた浮世絵が刊行されました。現在でも江島神社は日本三大弁財天を奉る神社として、弁財天信仰が受け継がれています。

【図３】三代歌川広重「東京常磐津総師匠江の嶋参詣の図」

「江島詣」の隆盛と江島の御師　鈴木良明

「江島詣（えのしまもうで）」はとりわけ大都市江戸の人々に人気があったといわれる。「江島詣」の隆盛には様々な要因をあげられるが「御師（おし）」の活発な活動も注目すべきひとつである。

【図４】「江島本宮岩屋」

「御師」とは特定の寺社に所属して、全国各地を訪れてはお札を配り、信奉者との特定の関係（師と檀家（だんか））を結び、その寺社の利益の喧伝や参拝を促し、且つ参詣となれば参拝の案内や宿泊業も兼ねる半俗の宗教者である。伊勢の御師、富士山の御師、大山の御師などは、その近麓に集落を形成するほどの職能者集団となっている。

江戸時代の江島には、縁起に基づき本宮、下之宮、上之宮の三所に弁財天が祀られ各々に祭祀を管理する別当（べっとう）がいた。すなわち、本宮は岩本院（いわもといん）、下宮は下之坊、上宮は上之坊の三別当であった。各院坊は、京都仁和寺（にんなじ）末に帰属し、その主（ぬし）たる別当は真言密教を修めた僧侶で、肉食妻帯者（上之坊は清僧の時期もあった）が就く《しきたり》があり、各々が経営基盤である特定の檀家を持って祭祀・経営を行った。

【図５】「江嶋上之宮」

慶安３年（1650）に別当方から島民を相手に訴状が奉行所に上がった（岩本院文書）。訴えの内容は、島民の者が参詣者たちを宿泊させ旅籠（はたご）屋経営を始めたことにより、別当方では参詣者の宿泊が減少し経営を逼迫させているので、島民方での参詣者宿泊を禁じて欲しいとの嘆願であった。ここで、島民14、5人ほどがお札を配り初穂料を受けて生計をたてていると、島民による御師的な活動者数が具体的に見える。

この訴状から窺えるのは、他山の「御師」が寺社側の認めた活動と義務のうえで成り立つ職能であるにもかかわらず、江島では別当方と島民間の「檀家」と「御師」制度が未整備であったため、勢い増加する参詣者を巡っての争論となった背景がわかる。

【図６】「江嶋下之宮」

「江島詣」を盛んにしていくためには江島弁財天を尊信する檀家・信奉者を増やさねばならない。そのためには、江島の弁財天を喧伝する「御師」の活動が重要となる。わずか三別当の活動では限界がある。別当たちの既得権益を守りつつ、島民「御師」の活動を容認すればより広範囲に檀家や参詣者が期待できる。訴訟後の約50年経った宝永期になると檀家を持つ島民御師が30名になっている。

別当方とともに島民御師の成長と活動は参詣者増に繋がったが、他山に比べ江島の御師数は小規模であったため、活動の範囲は全国広範な展開より、効率的な大都市江戸の住民にターゲットを絞ったのである。

鈴木良明（前鎌倉国宝館館長）

二代目オニカゲ学芸員のページ⑦
浮世絵を自分で摺ってみると…

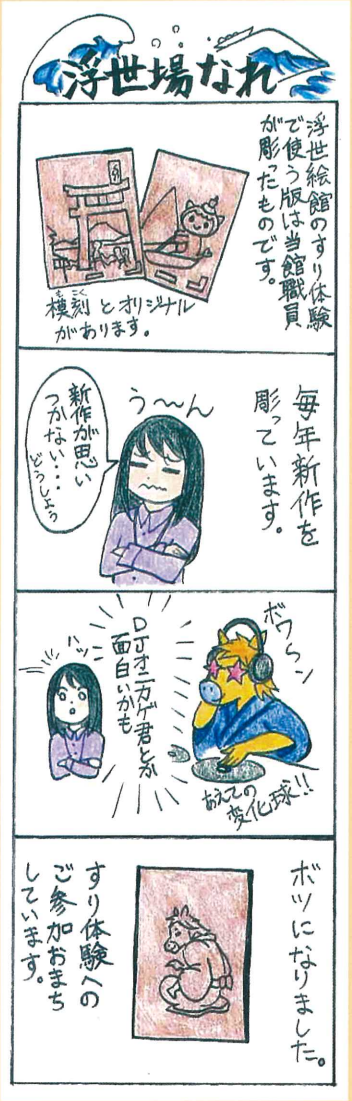
調べたことを、みなさまに「つたえる」ことも学芸員の大事な仕事のうちのひとつです。美術館や博物館でよく見かけるものだと、講座を催したり学校の課外演習の受け入れをしたり…これらは浮世絵館でも積極的に行っています。

さて、浮世絵館にはそれらに加えてちょっと特別な「つたえる」時間があります。それは、『浮世絵すり体験コーナー』です。

このコーナーは、今は展覧会開催期間中の毎週日曜日午後1時から5時に開かれています。

自分の手で版画を摺(す)ることができるコーナーで、その版木は浮世絵館お手製。本物の浮世絵の主線（輪郭）部分を抜き出して、木の板に彫ったものを使います。色は一色もしくは二色。よく見かける浮世絵のような色が使われたものでありませんが、短時間で、本物に近いバレンと湿らせた和紙、馬の毛のブラシを使ってちょびっと本格的に摺れるというところが大きなポイント。こうして文字だけで見てみると「なんだ、たったそれだけのことか」と思われるかもしれませんが、これが結構難しい！まんべんなく絵の具をのばせるか、紙を乾かさずに手早くできるか、それから摺る時の力の加減に方向に…など気にしたくなることがいっぱい！

この体験をしていただくことで、浮世絵を制作する職人さんがいかにすごかったか、そんなことがちょっとわかっちゃいます。そして版画をどこに飾ろうか、どうやって保存しようか…そうして悩むことで、江戸時代や明治時代にいた浮世絵愛好家の人たちの気持ちも伝わってくるかもしれません。



※8月11～13日にもすり体験コーナーがあります。詳しくはチラシや当館HPでご確認ください。

編集後記

江戸時代と現在の我々の江の島観光は時代が違えど、同じように各々楽しんだのでしょう。弁財天信仰をきっかけに隆盛した江の島詣が、現在の観光地として有名な江の島へ繋がっていったと思うと感慨深いものがあります。観光を楽しむ中にほんのちょっとみえてくる歴史を感じることで江の島をはじめ藤沢に伝わる郷土文化をレガシー（遺産）として後世の人々にも伝え、末永く楽しんでいただければ幸いです。

編集・発行：藤沢市藤澤浮世絵館

【住所】〒251-0041 神奈川県藤沢市辻堂神台２丁目２番２号ココテラス湘南７階
【電話】0466-33-0111　【FAX】0466-30-1817
【開館時間】10:00～19:00（入館は18:30まで）
【休館日】月曜日（祝日、振替休日の場合は翌平日）
※その他、展示替えのために休館日がございます
【ＨＰ】 藤沢市藤澤浮世絵館 で検索

facebook：藤澤浮世絵館 公式アカウント
⇦このマークが目印です。「いいね！」お願いします。